

「2023年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学教育学部3年 末富 佑弥

今回の留学に参加した動機の一つに、大学で選択した第二外国語である中国語を、大学の授業という限られた時間だけで勉強を留めてしまうことに勿体なさを感じ、せっかく第二外国語として履修したからにはせめて日常会話程度には使えるようになりたいと考え、その学びと実践の場として活用したいと考えたことがあった。そのため、1日約6時間ほどの長時間授業の中でネイティブの中国語を浴び、中国語で講義を聞き、話す習慣を持つことができたことは、大いに有意義であったと感じる。また、派遣された香港中文大学の先生方はとても親切でフレンドリーな方であり、中国語で話しつつ、わからない語彙があったら英語を併せて用いて尋ねることで語彙を補強してもらえることも、会話の練習の一助になったと思う。同じ授業の受講生と一緒に先生と昼食をとる機会も自主的に作り、課外でも中国語で話す機会を設けたのだが、その中で先生の出身である中国の「子供の遊びの文化」であったり、「中国における言語教育の諸課題」であったりといった自分の興味に即したことを聞くことができたのも、有意義であったと感じた。3週間のこうした授業を通して1番変化があったことは、間違いなく会話の障壁が下がったことである。初めは授業中に発言することも躊躇われるほどに中国語に自信がなかったが、例え間違えたとしてもそれを肯定してくれる環境が教室の中にあっただけのため、最終的には自主的に発言したり、意見交換をしたりできるようになった。このような成果が、留学における中国語の学習成果であると感じる。また、今回の留学を通じた意識の変化として中国語だけではなく、英語に対しても学習のモチベーションが芽生えたことも挙げられるだろう。留学生活の中で、大学内の寮に宿泊したのだが、同室がオランダ人だったこともあり、日常会話はほぼ英語で行われた。中国語よりは些かよく話すことができたものの、ネイティブの会話スピードに時折ついていけない部分もあり、コミュニケーションが円滑にいかないこともあった。そうした経験が、現在中国語のみならず、英語もより勉強したいと言うモチベーションを誘発していると考えている。

香港で過ごして得たものは学習上の経験だけではない。例えば、香港の食文化や生活など、長期間滞在して感じてることが多くあった。お茶で洗って楽しむ飲茶の文化、ゲームをしながら接客するコンビニの定員、ぱータードン（香港でメジャーなICカードの名称）を中心にキャッシュレス化が進んだ食堂やレストラン、さまざまな国籍の人が訪れるからこそほとんどのお店で採用されているモバイルオーダー、食事が割高で交通費が割安な物価の差異、室外機が外にむき出しになった高層ビルなどなど、日本では見られない光景やさ体験できない生活文化・生活様式を多々体験できたことは、自分にとって鮮明なものであった。また、香港中文大学の現地学生や、香港のエンジニア企業にインターンに来ていた中国人インターン生、同プログラムに参加していた他の日本人大学生など、多くの志高い人と出会うことができ、そのバックボーンを共有したり、自分たちの勉強の目的を聞いたりすることで親交を深め、得られた貴重な人脈もまた、本プログラムで得た貴重な斧であると言えるだろう。

プログラムは、文化体験、語学研修、自由時間などいずれにおいても学習経験。文化体験、人脈確保など様々なことに生かせるため、かなり満足であった。特に大学から提供された文化体験プログラムの一つである篆刻造りや、1人だとなかなか体験できないランタオ島での精進料理体験などといったものは、普通の観光ではあじわえない異文化に直にふれ、見て、体験できたという意味で印象的であった。自分の進路における関心の対象は日本や西洋の教育であるため、直接関連してくるものはないものの、英語の教育免許を取るにあたって「外国語を学ぶことで得られる学習成果やコミュニケーション範囲の広がり」を実感できたり、授業の中で実際に自分が勉強してきた外国語教授法のいくつかが使われていたことでその威力を実感することができたりと、間接的に生きてくる部分は多いと感じた。

このような有意義なプログラムを用意してくれた大学への感謝を以て、この原稿の執筆を終えることとする。